

なつの あさ

平成 30 年 7 月

沼尾 利郎



昭和のラジオ体操

1 ラジオ体操

毎年この時期になると昔の夏休みを思い出しますが、今でも懐かしいのが子供時代のラジオ体操です。私が小学生だった昭和30年代は夏休みの最初から最後までラジオ体操があり、真っ黒に日焼けした子供たちが朝から集まっては遊んでいました。近頃は夏になっても子供たちの遊び声が聞こえてきませんが、気になって調べてみると今年がラジオ体操が始まって90年目に当たるそうです。ラジオ体操はもともと逓信省簡易保険局(現在のかんぽ生命保険)が「国民の健康増進」を目的として作ったものであり、現在の形になったのは1951年からでした。子供にとっては出席カードに押しってもらうゴム印(スタンプ)の溜まるのがうれしくて、最終日には鉛筆やお菓子などをもらったような気がします。最近では子供の数が減っただけでなくラジオ体操の期間も短くなり、昭和生まれの中高年としては寂しい限りですね。



のらいぬ (谷内こうた 蔵富千鶴子)

2 なつの うみ

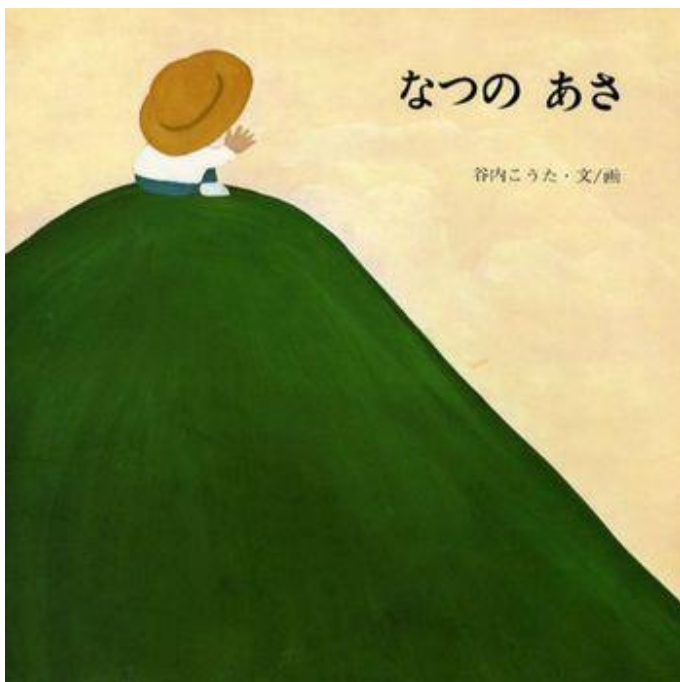
夏と言えば、家族で出かけた海水浴や臨海学校などが懐かしく思い出されます。海なし県（栃木）に生まれたので海に行くのはいつも夏であり、茨城県の大洗や阿字ヶ浦によく行きました。磯遊びでカニ・ヒトデ・ヤドカリなどをたくさん集めたり、海辺の花火大会では水面に映る花火が幻想的に綺麗だったことなど、「あの頃は子供たちも小さくて、妻もまだ…」などと感傷に浸りながら遠い目になっていると、ある絵本を思い出しました。「のらいぬ（絵 谷内こうた、文 蔵富千鶴子）」というその本は、簡潔なことばと透明感のある絵で孤独なのら犬の寂しさや哀しさを淡々と表現しており、静かな感動がありました。

あついひ
すなやまに
みつけた
ともだち

（中略）

あついひ すなやまに みつけた ともだち
いつか きっと あえる

「絵本は自分の心を映し出す鏡のようなもの」という言葉がありますが、その頃の自分は親元を離れて転校した学校にうまく慣れなくて、孤独を感じていたのかもしれませんが。



なつの あさ（谷内こうた）

3 なつの あさ

谷内こうたの絵本では、「なつの あさ」も忘れられない作品です。夏の早朝のひんやりとした空気と草いきれの中で、少年が早起きをしてまで見たかったものとは何だったのでしょうか。

なつの あさは みんな しろい
くさも みちも まだ ねむそう
いそげ いそげ

(中略)

きこえる きこえる
いつもの あのあと
だった しゅしゅ …
だった しゅしゅ …

短いことばとシンプルな絵がよくマッチして、心象風景のような遠い記憶の世界を見事に描き出していました（1971 ポローニャ国際絵本展グラフィック賞受賞）。簡潔な言葉で描かれている絵本だからこそ、そこに何を感じるかはその人次第であり、大切なものや忘れていたものを気づかせてくれるのが絵本なのでしょう。そこには人の心を癒す力があり、まさに「絵本はこころの処方箋」といえるかもしれません。少年時代をはるかに過ぎた現在でも、読み返すたびに心が浄化され感性がよみがえるような気がします。



なつの あさ（谷内こうた）



なつの そら